高知新聞
2005年（平成17年）8月21日（日曜日）

地域ワイド

「仁淀川再生」を探る

漁業、農業関係者一堂に

土佐市でシンポ

シンポジウム「仁淀川の森と水を考える」が二十日、土佐市高岡町甲の寿苑で開かれ、約三百五十人が山から海まで流域全体の自然環境保護の道を探った。

仁淀川再生を考えたシンポジウム（土佐市高岡町甲）

仁淀川漁協（吾川郡いの町、麻岡博組合長）が流域十市町村と漁業、農業などの関係機関三十五団体に呼び掛けて開催。まず、麻岡組合長が「砂利採取や家庭排水問題などが重なり、昔の豊かな自然が失われている。シンポを関係機関が一丸となる契機にしたい」とあいさつした。

続いて、京都大フィールド科学教育研究センター長の田中克氏が「森と川と海をつなぐ学問」と題して基調講演。「森は川を通じて海につながっている。この結び付きに人間の生活を溶け込ませるべきだ」とし、水の循環や浄化作用を例に挙げながら「森を守ることが川や海の再生になる」と訴えた。

また、県水産試験場の松浦秀俊技術次長が「仁淀川をめぐる現状」について報告。「仁淀川のアユ漁獲量は昭和五十三年の四百七十六トンをピークに、昨年は九十トンまで下落した。禁漁期間設定や水質改善が必要だ」と説明した。

続いて、釣り人や水生生物研究家ら流域の関係者を集めてパネルディスカッション。アウトドアライターの天野礼子氏をコーディネーターに、川を守るボランティア制度などについて活発に議論した。